

第6節 光構内(御手洗遺跡・月待山遺跡)の調査

教育学部附属光小学校エレベータ昇降路等新設に伴う試掘調査・立会調査



図 14 調査区位置図

調査地区 光構内小学校校舎周囲

調査面積 169㎡

調査期間 平成15年11月20日～12月24日、
平成16年1月22・28・29日、2月9・10日、
3月4日

調査担当 横山成己

調査結果

(1) 調査の経過(図14、写真10・11)

教育学部附属光小学校に身障者用施設設置の必要性が生じたため、身障者用エレベータ、玄関スロープ、身障者用便所の新営、またそれに伴い給排水設備の改修工事が計画された。これらの開発予定地の内、エレベータおよびエレベータを迂回する給排水設備部分(A調査区)については、その近接地で平成2年に資料館が実施した光構内教育学部附属光小学校運動場改修に伴う発掘調査により、6世紀から7世紀代にかけての遺構が2層にわたり検出されていること^{註1}から、埋蔵文化財が埋存している可能性が高いと推測された。一方身障者用便所予定地(B調査区)は小学校校舎の建設工事により大きく攪乱を受けているものと予想され、また玄関スロープ予定地(C調査区)は掘削深度が浅いため埋蔵文化財の保護上問題がないものと予想された。

以上の経過を経て、埋蔵文化財資料館運営委員会の審議・判断に基づき、文化財保護法の下にA地区は試掘調査を、B・C地区に関しては立会調査を実施することとなった。

(2) A調査区

A調査はエレベータ新設予定地であり、開発掘削深度がもっとも深くなる地点である。光構内が海浜部の砂質土層および砂層上に立地していることもあり、調査掘削中の壁面崩落の危険性が想定されたため、調査区を3分割して掘削を行い、終了カ所から順次埋め戻すことで調査の安全を維持することとなった。



写真 10 A調査区調査前全景(北から)



写真 11 C調査区調査前全景(東から)

a. 基本層序(図15、写真12・13)

A調査区の基本層序は、調査区北西壁を基準として、

第1層…表土(層厚約15cm)

第2層…褐色(7.5YR4/6)砂質土※1~3cmφの小礫多く含む(層厚約20cm) ~ 第1遺構面の検出層

第3層…黄褐色(10YR5/6)砂礫※0.5~4cmφの小礫多量に含む(層厚約30cm) ~ 第2遺構面の検出層

第4層…にぶい黄褐色(10YR5/4)粗砂※砂粒0.5cmφと褐色(10YR4/4)細砂※0.5~5cmφの小礫多量に含むの互層(層厚約50cm) ~ 第3遺構面の検出層

第5層…青灰色(5PB6/1)細砂※0.5~2cmφの小礫多く含む(層厚約30cm)

第6層…明青灰色(5PB7/1)細砂※0.5~2cmφの小礫少量含む(層厚40cm以上)

である。この内、第1遺構面検出層である第2層は調査区全域で確認されたが、第2遺構面検出層である第3層および第3遺構面検出層である第4層は、調査区北東側(海岸側)で消滅する。これは、海岸域の浸食作用によって消滅しているものと考えられる。

また、第2層はその層中に遺物を含む遺物包含層となっている。そもそも光構内に遺跡が埋存していることが明らかとなったのは、昭和40年に実施された附属中学校の建築工事中のことである。その調査の記録を見ると、工事掘削中に縄文時代から中世にわたる遺物が包含されている層が検出されたのであるが、「包含層は黒褐色の海成砂礫層である。なお、包含層の上下共に海成の砂礫層であるが色が黄茶褐色、黄褐色、褐色等の層をなしているので、包含層との区別は明瞭であった。」と記述されている^{註2}。中学校体育館はA調査区の東約90mに位置しているが、ここで記されている遺物包含層と今回検出した遺物包含層は堆積層の特徴から見ると性格を異にするものようである。

一方、今回の調査地から西に約30mの地点で平成2年に実施された光構内教育学部附属光小学校運動場改修に伴う発掘調査での基本層序を見てみると、

第1層…表土(層厚約30cm)

第2層…褐色(10YR4/5)砂質土(層厚約20~40cm) ~ 遺構検出層

第3層…明黄褐色(2.5Y6/6)細砂 ~ 遺構検出層

となっており、調査の結果この第2層は5世紀前半~7世紀代初頭の時期幅を有する遺物包含層であることが確認されている。

この層序および遺物包含層の性格は、A調査区の調査成果とほぼ同じ内容を有している。これらの調査成果から、光構内でも峨嵋山から派生する丘陵により近い地点(本調査A調査区・平成2年調査地)と海岸部に近い地点(昭和40年調査地)では遺物包含層の形成に大きな差異が見いだせる。



写真12 A調査区南西部北西壁土層断面(南東から)



写真13 A調査区中央部北西壁土層断面(南東から)

b. 遺構

第1遺構面(図15・写真14～17・表2)

第1遺構面で検出された遺構としては、ピット、土壌、溝、暗渠などがある。これらの遺構は出土遺物から近世～近現代のものと考えられるが、その多くは過去に現光構内に所在していた山口県立工業学校(明治36年設立)、現在の附属光小・中学校の前身である山口県室積師範学校(大正3年設立)などに関連する施設の痕跡と考えられる。各遺構から出土する遺物には近世以前に遡りうるものもあるが、多くは器種および時期の判別不能な小片であり、またそれらの大部分は近現代の遺物と混在して出土する状況である。

各遺構の規模等は下記の表の通りであるが、この中で注目される遺構としては、礎石を有する柱穴(Pit17・18)と溝(SD5・6・10)である。両者はその軸方向を一にしており、同時期に所属する遺構群である可能性が高い。礎石中心間の距離は約190cmである。

平成2年実施の運動場改修に伴う発掘調査では、A調査区第1遺構面と同一面と考えられる第2層上面において、6世紀末～7世紀初頭の遺物を埋土に含む土壌1基を検出しているが、今回の調査では同時期の遺構は検出されなかった。

表2 A調査区第1遺構面遺構観察表

種類	遺構番号	平面形態	平面規模(cm)	深さ(cm)	出土遺物	時期	備考	
ピット	Pit1	楕円形	44×50	11.0				
	Pit2	不明	(42)×不明	7.3				
	Pit3	不明	不明	7.5				
	Pit4	楕円形	30×46	7.2				
	Pit5	不明	不明	11.0			2段Pit	
	Pit6	楕円形	12×15	5.5				
	Pit7	円形	径 28	3.0				
	Pit8	不明	(18)×不明	2.7				
	Pit9	隅丸方形	38×42	11.5		陶器・瓦・ガラス	近現代	
	Pit10	楕円形	42×47	8.1		土師器・磁器	江戸後～近代	
	Pit11	楕円形	50×(42)	3.5				
	Pit12	円形	径 20	12.6		瓦	江戸後～近代	
	Pit13	不明	(36)×不明	10.8				
	Pit14	円形	径 33	2.8		磁器・瓦	江戸後～近代	
	Pit15	長方形	40×58	11.8		土師器		2段Pit
	Pit16	不明	不明	4.3				
	Pit17	楕円形	45×51	10.3		瓦	江戸後～近代	礎石
	Pit18	楕円形	43×53	10.3		陶器・瓦	江戸後～近代	礎石
	Pit19	楕円形	22×30	3.6				
	Pit20	楕円形	47×56	9.3		磁器	江戸後～近代	
	Pit21	不明	(36)×不明	9.4				
	Pit22	楕円形	45×76	6.4				
	Pit23	円形	径 17	4.0				
	Pit24	楕円形	21×不明	5.8				
	Pit25	楕円形	13×16	3.6				
	Pit26	楕円形	19×32	6.9				
	Pit27	不明	不明	3.6				
	Pit28	楕円形	17×22	10.0				
	Pit29	不明	不明	2.3				
土壌	SK1	方形か	(134)×(267)	46.3	土師器・陶器・瓦質土器	江戸後～近代		
	SK2	楕円形か	(93)×(27)	7.4				
	SK3	楕円形か	59×(74)	10.0				
	SK4	楕円形	53×76	16.5	土師器・磁器・陶器・瓦	江戸後～近代	南東部に段	
	SK5	長方形か	(62)×(170)	94.0	土師器・瓦質土器・磁器・陶器・瓦・土製品	近現代		
	SK6	隅丸長方形	32×105	8.1				
	SK7	楕円形か	67×(48)	16.7				
溝	SD1		90×(830)	21.0	土師器・瓦質土器・磁器・陶器・レンガ	近現代	石敷暗渠	
	SD2		31×(51)	9.6				
	SD3		20×(46)	11.7				
	SD4		83×(358)	6.3	土師器	近現代	石敷暗渠	
	SD5		48×173	7.0	陶器・瓦	江戸後～近代		
	SD6		44×300	14.3	土師器・瓦質土器・磁器・陶器・瓦・砥石	江戸後～近代		
	SD7		36×(67)	4.5				
	SD8		26×85	5.4				
	SD9		51×205	5.1	土師器	近現代		
	SD10		49×(138)	10.0				

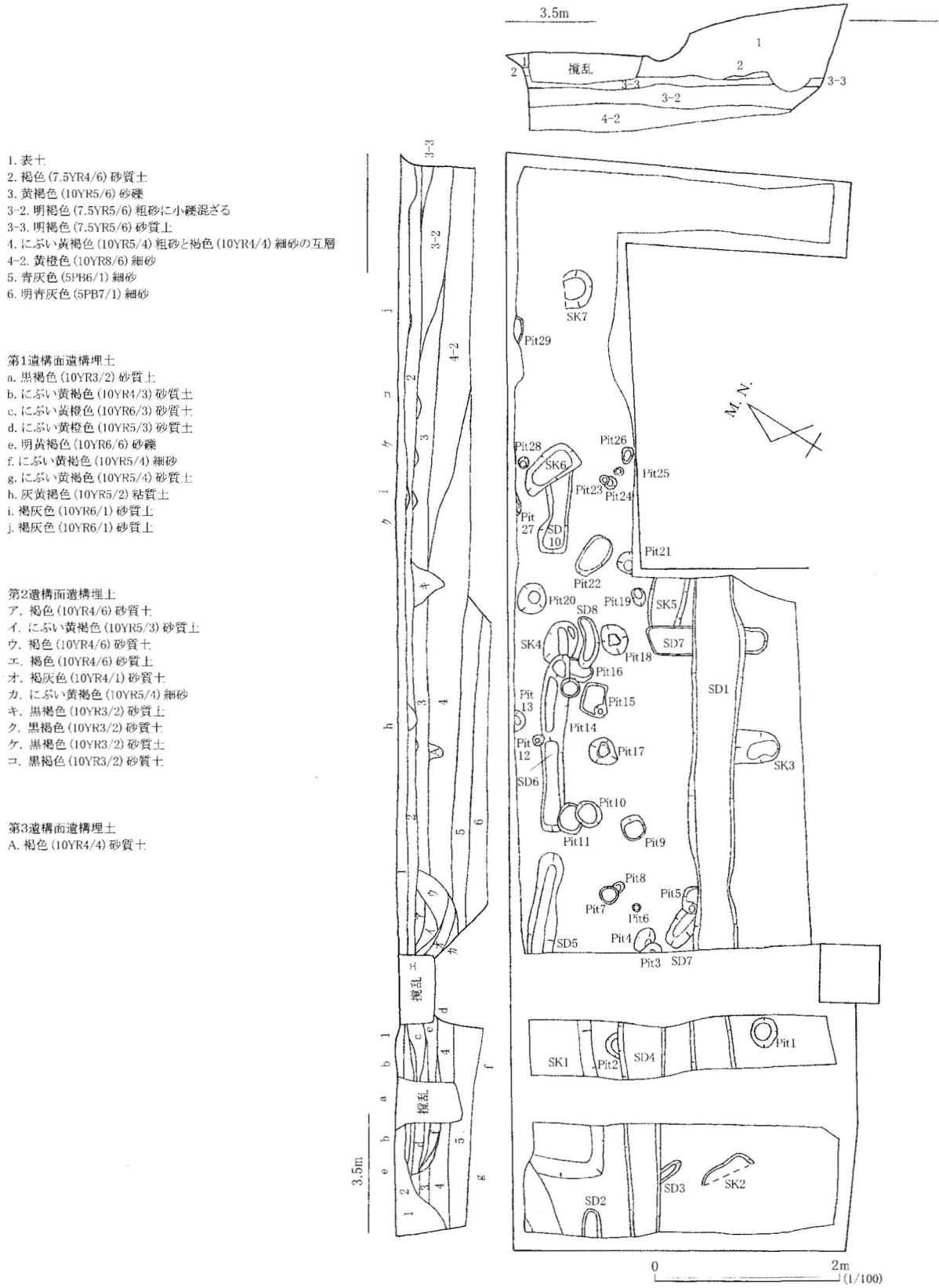


図 15 A調査区第1遺構面平面図・土層断面図

第2遺構面(図16・写真18～21・表3)

第2遺構面では、ピット39基、土壇5基、溝5条が検出された。

これらの遺構の内、ピット群は配置・規模が不揃いであり、掘立柱建物等の復元には至っていない。そもそも本稿では平面形態が小型円形、もしくは円形状を呈する遺構をピットと呼称しているが、柱穴という認識は妥当であろうか。第2遺構面の基盤層である第2層は非常に脆弱な砂質土であり、柱の設置は可能であったとしても上方に重量のある建築物を長期間維持し続けることは困難なものと推測される。ピット内に礎石等の施設も確認されないため、これらのピット群の性格にはさらに検討の余地がある。

土壇5基は、上層遺構や既設の管路による破壊が激しく、また遺構の一部が調査区外に及ぶことから、全体の形状を把握できるものはない。残存部分から平面形態を推測すると、円形もしくは楕円形状を呈するものが多いようである。断面形態は、すり鉢状に底面を形成するもの(SK2・4・5)と丸底状のもの(SK1・3)とに分類できる。これらの土壇の性格に関しては、出土遺物がきわめて少なく判断材料にかけられる。ただし、柱穴遺構と同様に基盤層が脆弱であるため、遺構壁面が長期間崩落せずに保っていたとは考えがたい。事実、調査時の遺構掘削においては、遺構周辺を歩くだけで遺構壁面が崩落してしまうほ

表3 A調査区第2遺構面遺構観察表

種類	遺構番号	平面形態	平面規模(cm)	深さ(cm)	出土遺物	時期	備考
ピット	Pit1	不明	不明	不明			
	Pit2	不明	不明	4.6			
	Pit3	円形	径 22	5.3			
	Pit4	円形	径 29	8.9			
	Pit5	円形	径 13	8.5			
	Pit6	不整形	29×59	16.5			
	Pit7	不整形	67×不明	10.5			
	Pit8	円形	径 27	5.0			
	Pit9	円形	径 19	8.5			
	Pit10	楕円形か	18×不明	5.8			
	Pit11	楕円形	38×48	17.3			
	Pit12	楕円形	13×18	6.5			
	Pit13	不整形	47×不明	10.6			
	Pit14	不明	不明	6.9			
	Pit15	不明	不明	17.7			
	Pit16	楕円形	25×28	25.9			
	Pit17	楕円形	21×26	19.4			
	Pit18	円形	径 24	15.0			
	Pit19	円形	径 26	15.5			
	Pit20	隅丸長方形	37×75	10.8			
	Pit21	楕円形	30×58	12.8			
	Pit22	円形	径 22	16.3			
	Pit23	円形か	(径 63)	13.2			
	Pit24	楕円形か	14×不明	6.0			
	Pit25	楕円形	27×44	18.2			
	Pit26	隅丸長方形	40×68	12.2			
	Pit27	不整形	67×69	20.2			2段Pit
	Pit28	楕円形	21×25	10.7			
	Pit29	楕円形	37×44	11.8			
	Pit30	楕円形	33×38	18.8			
	Pit31	不明	不明	57.5			
	Pit32	不明	(44)×不明	17.4			
	Pit33	楕円形か	22×不明	4.1			
	Pit34	楕円形か	47×不明	12.6			
	Pit35	楕円形か	55×不明	43.3	土師器		
	Pit36	楕円形か	31×不明	17.9			
	Pit37	楕円形か	31×不明	7.1			
	Pit38	不明	42×不明	11.3			
	Pit39	不整形	70×不明	11.0			
土壇	SK1	不明	不明	36.0	土師器		底面に小Pit 6カ所検出
	SK2	不明	不明	16.2			
	SK3	円形か	不明	72.4	土師器		
	SK4	円形か	不明	37.0	土師器		
	SK5	隅丸方形か	不明	30.0			
溝	SD1		31×96	20.5			
	SD2		40×151	17.3			「く」の字に 屈曲

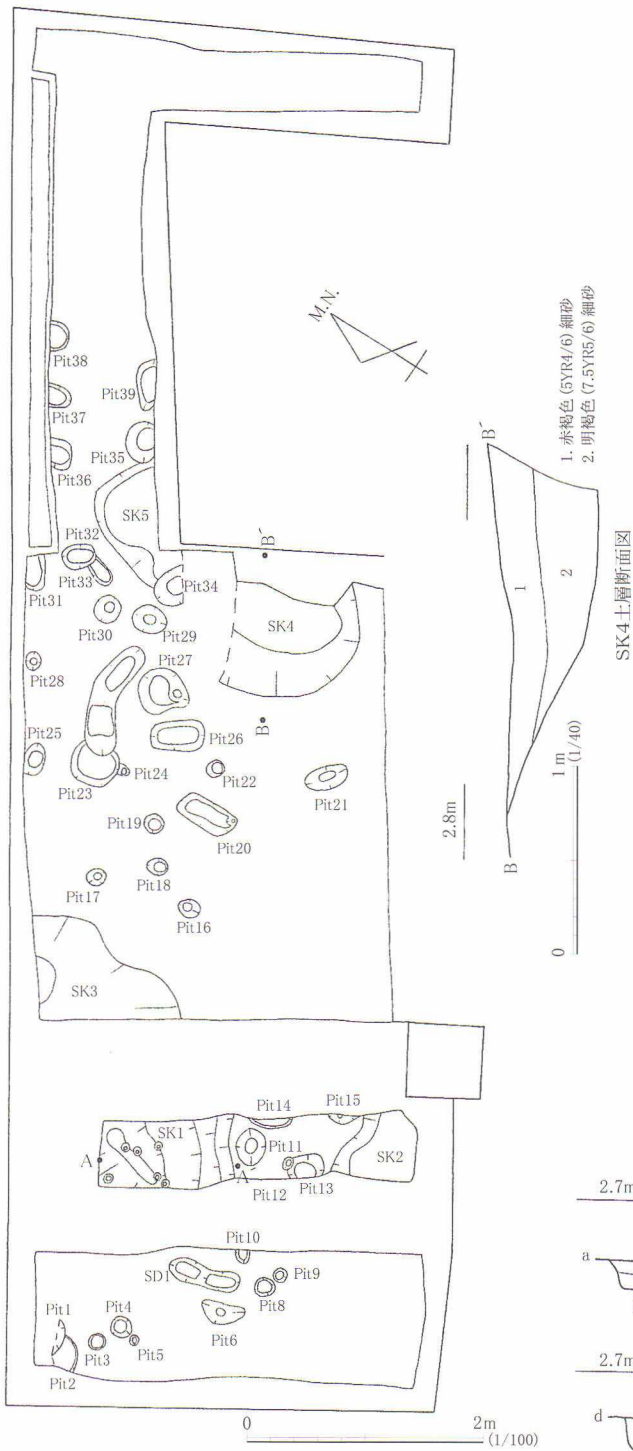


図 16 A調査区第2遺構面平面図・断面図

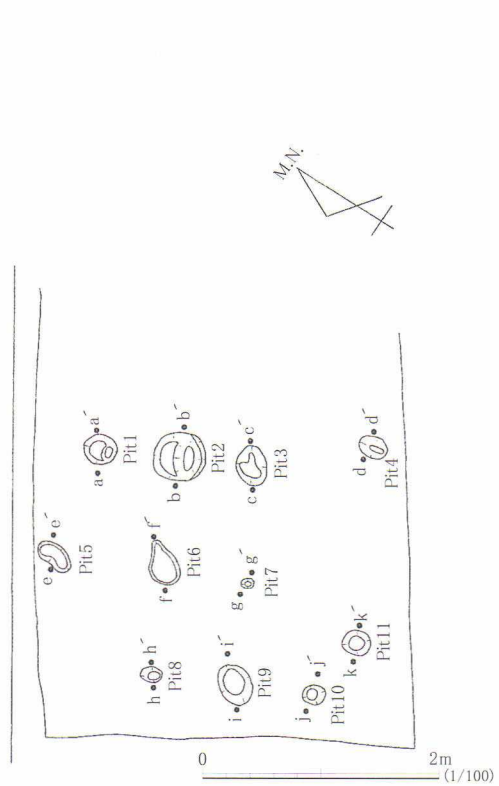


図 17 A調査区第3遺構面平面図

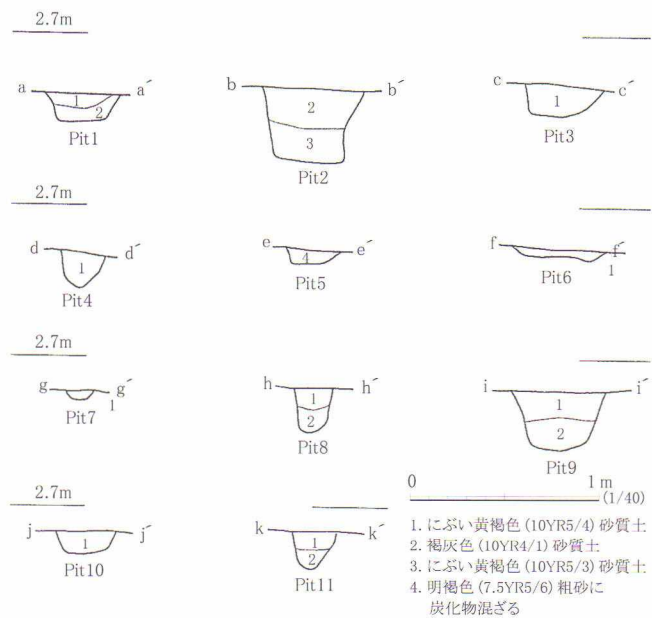
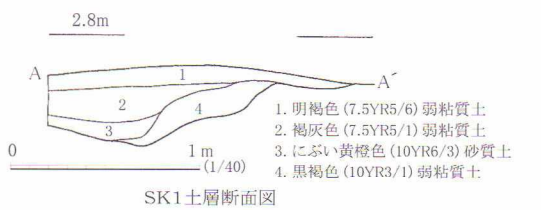


図 18 A調査区第3遺構面遺構断面図



写真 14 A調査区中央部第1遺構面遺構検出状況
(北東から)

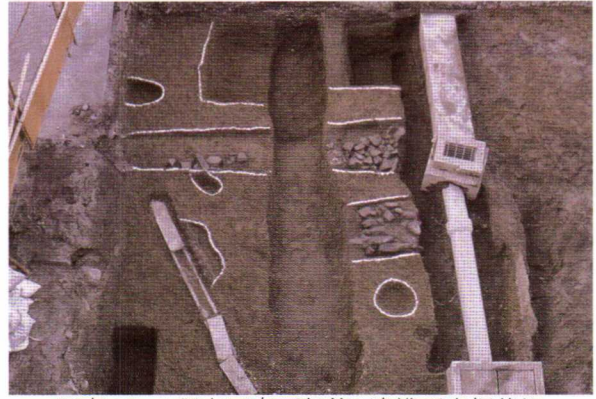


写真 15 A調査区南西部第1遺構面完掘状況
(南東上方から)

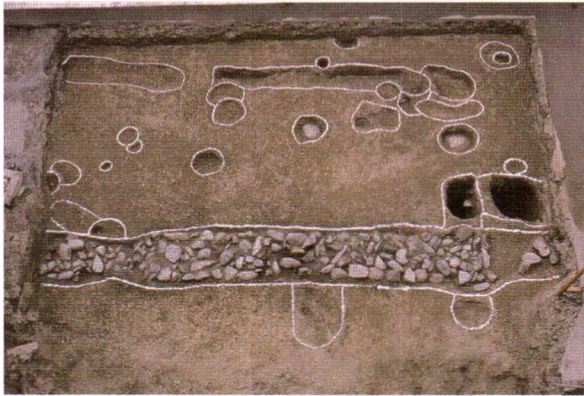


写真 16 A調査区中央部第1遺構面完掘状況
(南東上方から)

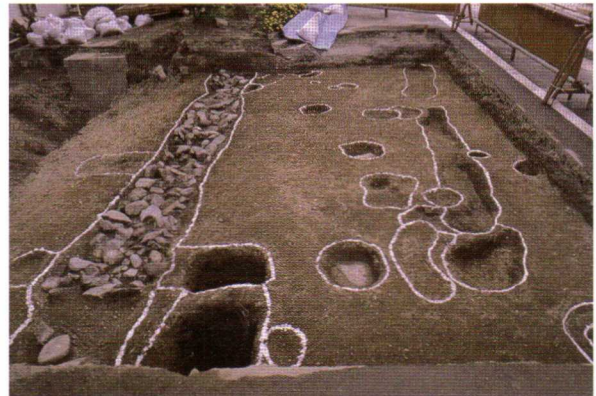


写真 17 A調査区中央部第1遺構面完掘状況
(北東から)



写真 18 A調査区南西部第2遺構面完掘状況
(南東上方から)

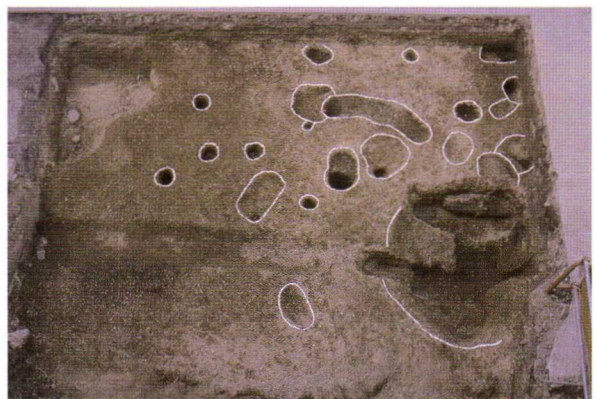


写真 19 A調査区中央部第2遺構面完掘状況
(南東上方から)



写真 20 A調査区第2遺構面SK1土層断面
(北東から)



写真 21 A調査区第2遺構面SK4土層断面
(南東から)

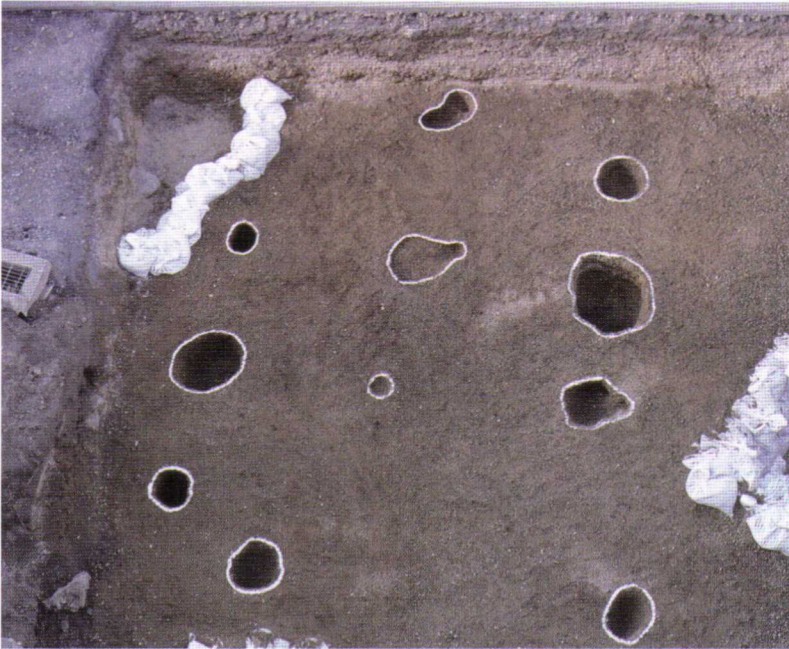


写真 22 A調査区中央部第3遺構面完掘状況
(南東上方から)



写真 29 第3遺構面Pit7半裁状況
(南東から)



写真 30 第3遺構面Pit8半裁状況
(南東から)



写真 23 第3遺構面Pit1半裁状況
(南東から)



写真 26 第3遺構面Pit4半裁状況
(南東から)



写真 31 第3遺構面Pit9半裁状況
(南東から)



写真 24 第3遺構面Pit2半裁状況
(南東から)



写真 27 第3遺構面Pit5半裁状況
(南東から)



写真 32 第3遺構面Pit10半裁状況
(南東から)



写真 25 第3遺構面Pit3半裁状況
(南東から)



写真 28 第3遺構面Pit6半裁状況
(南東から)



写真 33 第3遺構面Pit11半裁状況
(南東から)

どであった。したがって、これらの土壌は掘削してすぐに埋める、もしくはすぐに埋まることを前提に構築されたものであろう。遺構内埋土は遺構基盤層と同様の砂ないし砂質土、色調もほぼ同一であり、有機物等によって土壌化した形跡はない。

一方、平成2年実施の運動場改修に伴う発掘調査では、A調査区第2遺構面と同一面と考えられる第3層上面において、断面形態台形の土壌4基が確認されている。平面形態は、円形もしくは楕円形と推定できるもの3基、隅丸方形のもの1基である。遺構内埋土からは土師器・須恵器の小片が出土しているが、時期を推定しうる資料ではない。

第3遺構面(図17・18、写真22～33、表4)

調査区中央部において、ピット11基が検出された。ピット群は一見するとPit1～3、Pit5～7、Pit8・9・11の北西－南東方向の列、Pit2・6・8、Pit3・7・9の北東－南西方向の列とが規則的配列を見せているように思えるが、このピット群から建物の平面形態および規模を復元するには至らなかった。また、第2遺構面で検出されたピット群同様、遺構底面に礎石等の設備も有しておらず、やはり長期間使用する建築物の支持を前提とした柱穴としての性格は想定しがたい。

各柱穴の形態を見ると、平面形態としては不整形なものもあるが総じて楕円形状を呈している。一部に段状の施設を有しているもの(Pit1～3)もあるが、意図的なものではなく柱状施設の差し込みまたは抜き取りの際に生じた痕跡である可能性がある。底面の断面形態は、ほぼ平坦なもの(Pit1～3・5～7・10)とU字形を呈するもの(Pit4・8・9・11)とに分類される。

遺構内埋土からはPit3・7から土師器片が出土している。極細片であるため、器種および時期の判別は不可能である。

表4 A調査区第3遺構面遺構観察表

種類	遺構番号	平面形態	平面規模(cm)	深さ(cm)	出土遺物	時期	備考
ピット	Pit1	楕円形	38×42	24.0			北西部に段状部分
	Pit2	楕円形	61×68	44.8			北西部に段状部分
	Pit3	楕円形	39×52	22.1	土師器		北東部に段状部分
	Pit4	楕円形	29×39	17.5			
	Pit5	不整形	28×49	8.9			
	Pit6	不整形	40×60	5.1			
	Pit7	楕円形	14×17	4.1	土師器		
	Pit8	楕円形	20×28	11.6			
	Pit9	楕円形	44×58	8.5			
	Pit10	楕円形	33×38	18.8			
	Pit11	楕円形	26×31	28.6			

c. 遺物

第1遺構面出土遺物(図19、写真34)

1～3・8は陶器および粗陶器。1は陶器口縁部片であり、口縁は端部を折り曲げ外表面に接合させる。上端部は素地を残す。2は瓦質粗陶器口縁部片。口縁はほぼ直角に外反させる。内面調整は横方向のハケ。1、2共に器種は鉢か。3は土師質粗陶器の播鉢底部。内底面には7本単位の卸目を左回りに施す。体部内面も卸目を左回りに連続して施す。8は陶器播鉢口縁部片。口縁を「く」の字に外反させる。卸目は左回りに施す。

5～7は磁器。5は皿底部片。見込みには不明文様と圏線を1条、外面には不明文様と圏線7条、また高台外面にも圏線を1条施す。畳付釉剥ぎ。6は碗底部片。内面に圏線1条、外面は圏線(下半7条、上半現存2条)と丸文を施す。高台外面に圏線1条。畳付釉剥ぎ。7は碗口縁部片。内面口縁部下に圏線2条、外面は圏線2条と格子文を描き、背景に山と思われる文様を描く。6・7は染付に人工コバルトを用い

ている。

9～11は瓦質土器。9は鍋口縁部片。口縁を「く」の字状に外反させる。内面には煮炊きにより有機物が付着している。10は外面に花文スタンプを押捺する。火鉢片か。11は脚部および底部。粗製の短い脚を有する。火鉢片か。

12・13は瓦。12は珠文帯を有する軒丸瓦。13は丸瓦。凹面胴部にタタキによる棒状痕跡が残る。玉縁連結部分付近に釘穴を有する。

14は瓦質焼成された用途不明品。13・14は七厘のサナ。両者ともに中央に1孔、周囲に6孔が復元される。

4は砂岩製の砥石。部分的に破損しているが、ほぼ原形をとどめる。正方形に側縁を加工した板状の石の片面を使用している。反面は自然面を残す。

各遺物の出土遺構は、2がSK1、1がSK4、3・4がSD6、5～16がSK5である。

第2遺構面出土遺物(図20、写真35)

17・18は器種不明土師器。17は端部直下に凸帯を付加する。断面は縦・横共にわずかに円弧を描くがほぼ直線的な形態である。図示した方向で外面調整は縦方向のハケ、内面は横方向のナデ。端部は鈍く面を形成している。18は端部からやや下がった位置に凸帯を付加する。断面形態および調整は17と同様であり、同一個体である可能性が高い。器種としては竈形土器の部分である可能性がある。

出土遺構は、17がPit35、18がSK4である。

第2層出土遺物(図20、写真35)

19～20は土師器。19は器種不明品。端部の形態から基底部と考えられる。復元径25.0cm。外面は縦方向のハケ、内面は横方向のケズリ。器種としてはやはり竈形土器の基底部片である可能性があるが、内面に煤等の付着は見られない。20は土師器角状把手。把手周囲および内面調整はナデであるが、外面に一部縦方向のハケが残る。

21は須恵器体部片。調整は外面格子タタキ、内面はナデ。器種不明。

22は土師器甕の頸部から体部にかけての破片と思われるものであるが、土師器甕としては器壁が薄く、他の土師器類と比べるとやや硬質の感がある個体である。調整は外面は縦方向の平行タタキ、内面には横方向の緻密なナデが施されている。所属時期は不明と言わざるを得ないが、韓式系の軟質土器である可能性を指摘しておく。

光構内では、過去にも韓式系土器の出土例がある。平成11年に資料館により実施された光小・中学校上水道(給水管)改修に伴う試掘・立会調査では、鳥足文タタキが施された竈形土器が出土している^{註3}。また平成3年に実施された光中学校武道館新営に伴う発掘調査では、外面に格子目状のタタキ、内面にハケ調整が施された土器片3点^{註4}が出土しており、報告者は韓式系土器である可能性を示唆している。これらの出土例は、当地における古墳時代を特徴づける遺物として注目される。

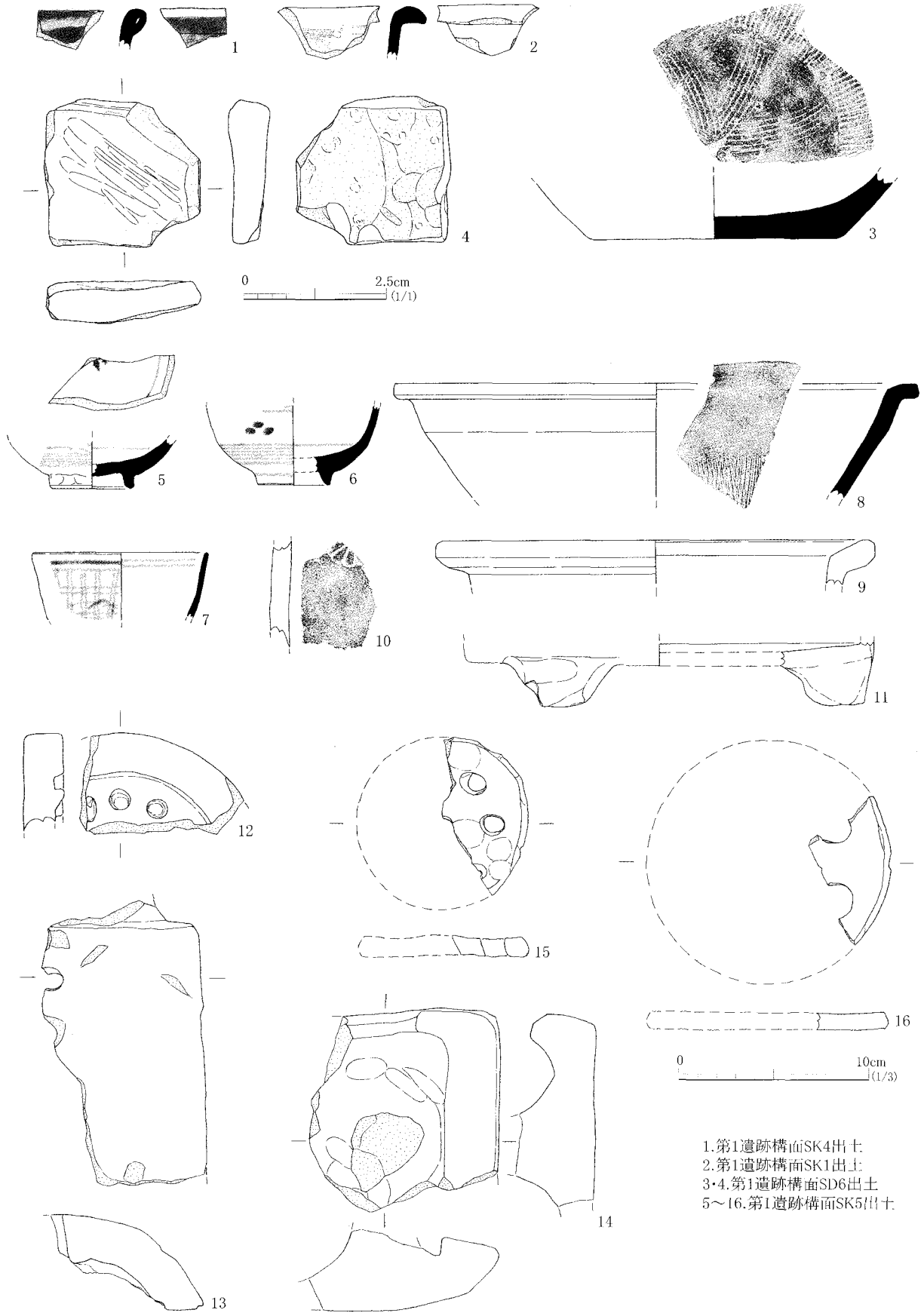


図19 A調査区第1遺構面出土遺物実測図

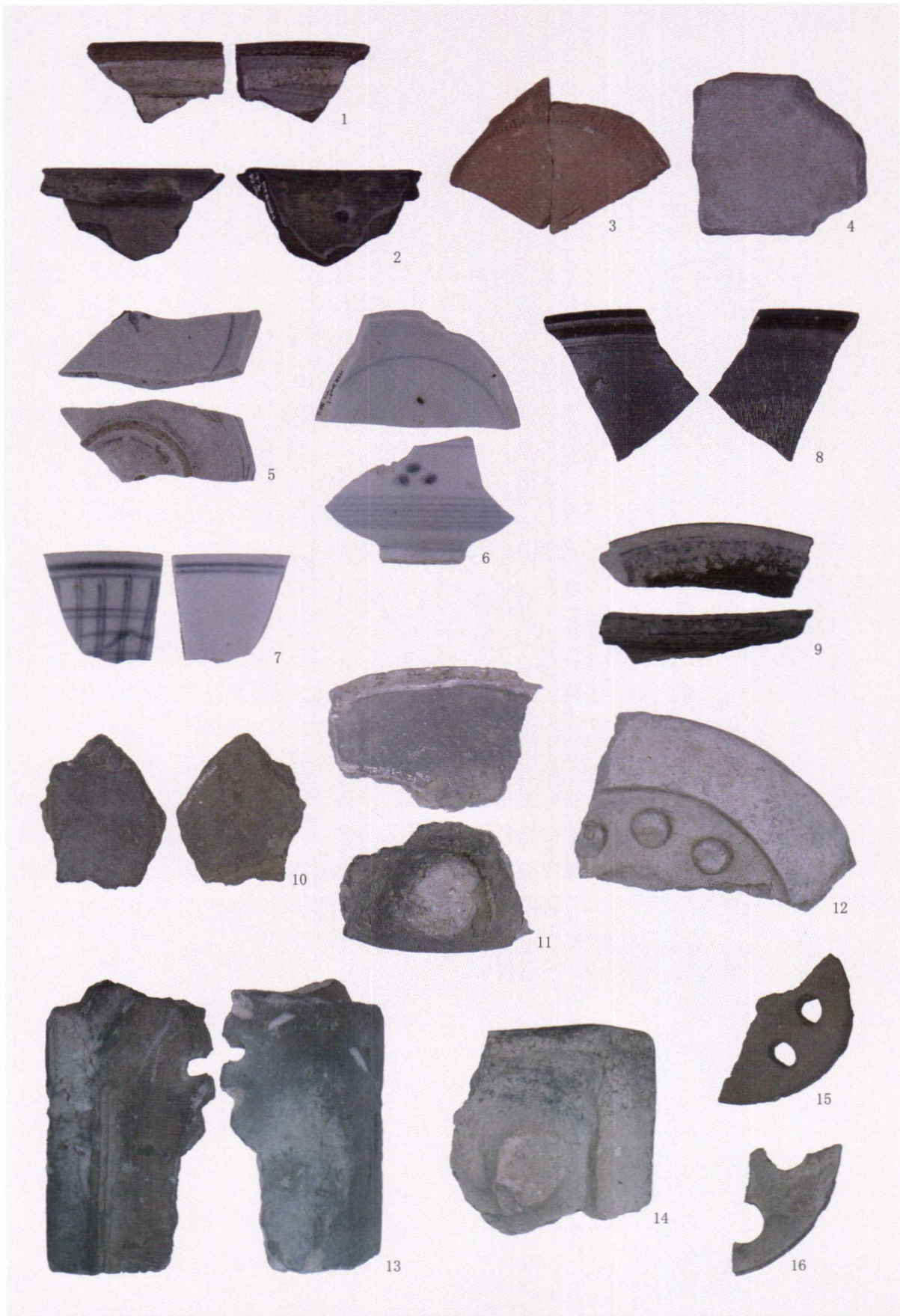


写真 34 A調査区第1遺構面出土遺物

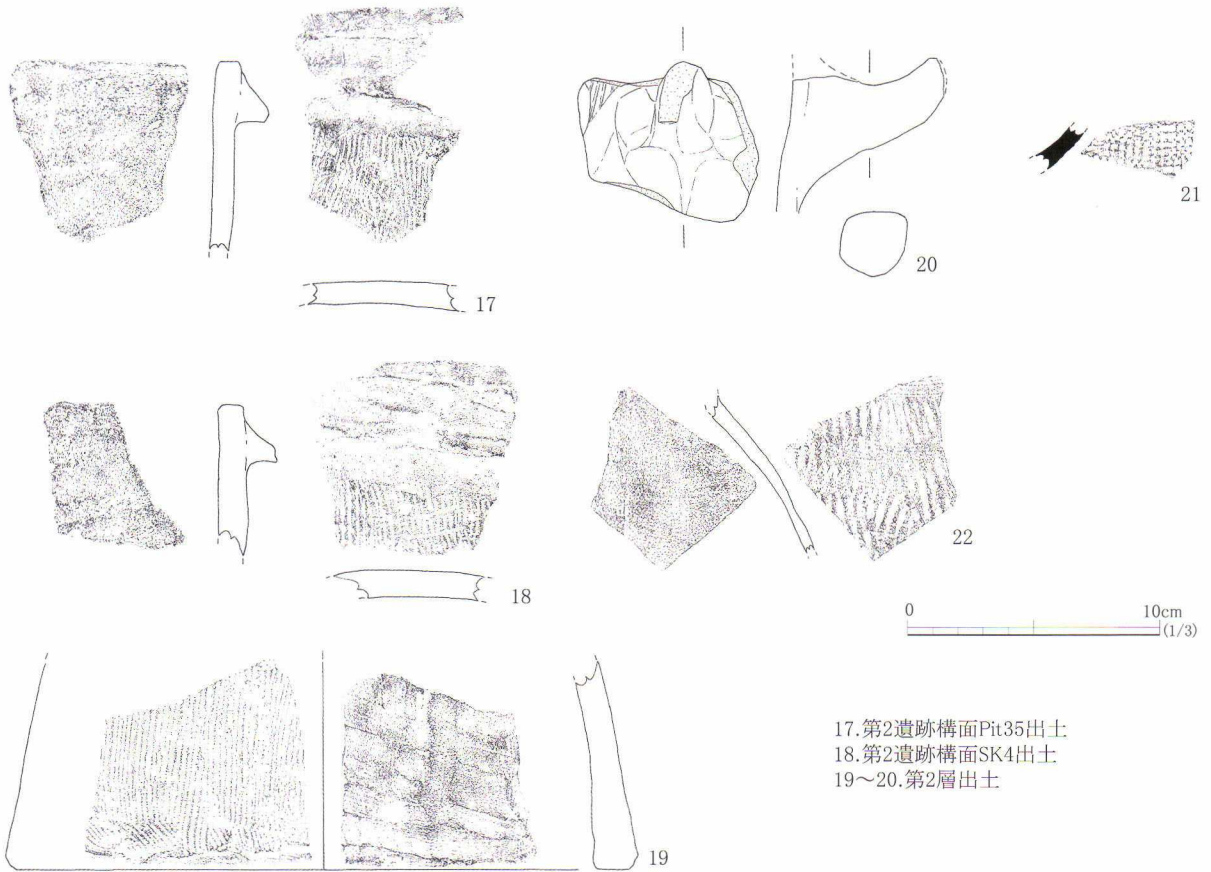


図 20 A 調査区第2遺構面・第2層出土遺物実測図

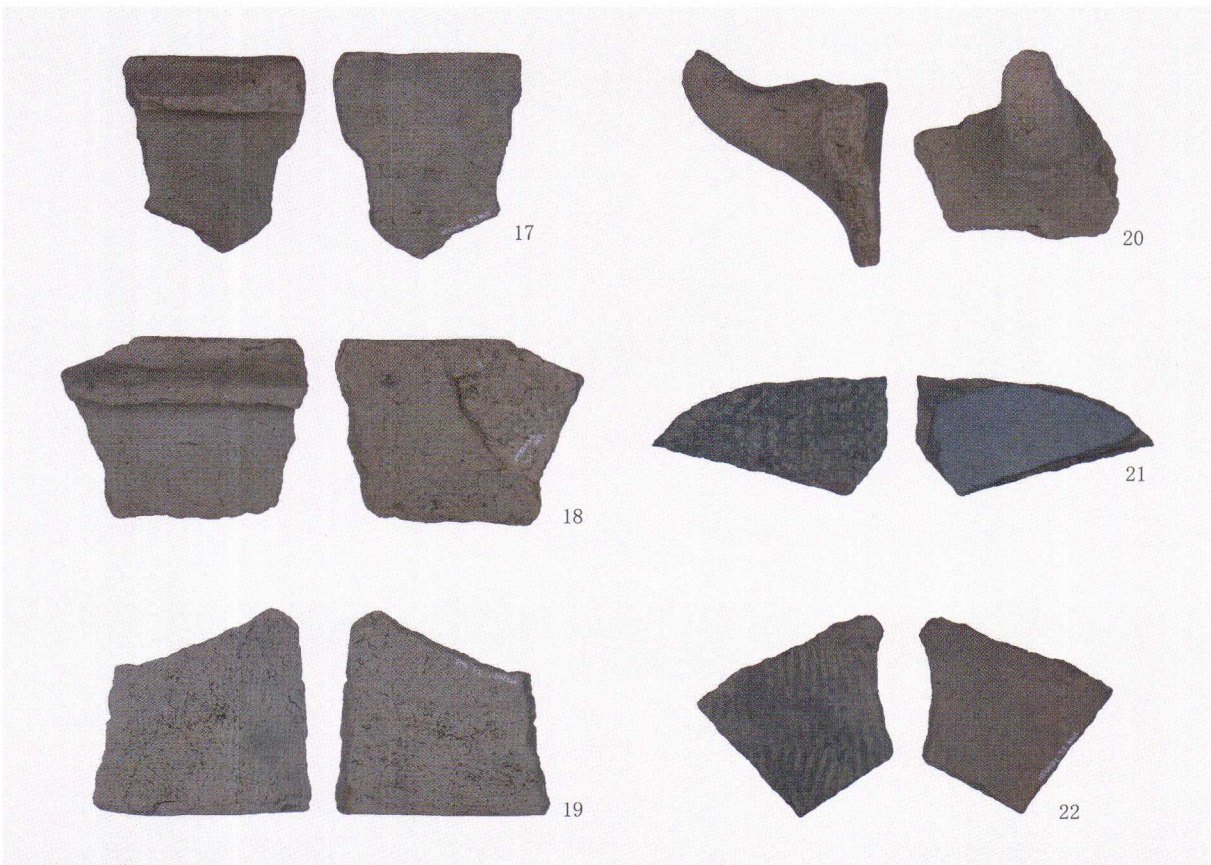


写真 35 A 調査区第2遺構面・第2層出土遺物

表5 出土遺物(土器)観察表

法量()は復元値

遺物 番号	地区	出土遺構	層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調		胎土	備考
							①外面	②内面		
1	A	第1遺構面SK4	埋土	陶器 鉢か	口縁部		素地 にぶい黄橙色(10YR6/3)	釉 灰黄色(2.5Y6/2)	精緻	灰釉
2	A	第1遺構面SK1	埋土 第1層	瓦質粗陶器 鉢か	口縁部		①灰色(5Y5/1)	②灰色(5Y4/1)	精緻	
3	A	第1遺構面SD6	埋土	土師質陶器 播鉢	底部	②(12.8)	①②明赤褐色(2.5YR5/6)		0.5~5mmφの粗砂粒 少量混ざる	
5	A	第1遺構面SK5	埋土	磁器 皿	底部~ 体部	②(4.0)	素地 灰白色(7.5Y7/1)	釉 灰白色(5Y7/1)	精緻	染付
6	A	第1遺構面SK5	埋土	磁器 碗	底部~ 体部	②(3.6)	素地 灰白色(5Y8/1)	釉 透明	精緻	染付 暈付釉剥ぎ
7	A	第1遺構面SK5	埋土	磁器 碗	口縁部	①(9.0)	素地 灰白色(5Y8/1)	釉 透明	精緻	染付 暈付釉剥ぎ
8	A	第1遺構面SK5	埋土	陶器 播鉢	口縁部	①(27.4)	素地 橙色(5Y6/6)	釉 黒褐色(5YR2/1)	精緻	鉄釉
9	A	第1遺構面SK5	埋土	瓦質土器 鍋	口縁部	①(23.0)	①②黒色(10YR2/1)		0.5~1mmφの粗砂粒 少量混ざる	
10	A	第1遺構面SK5	埋土	瓦質土器 火鉢か	体部		①黄灰色(2.5Y5/1)	②灰黄褐色(10YR6/2)	0.5~2mmφの金雲母 等砂粒少量混ざる	
11	A	第1遺構面SK5	埋土	瓦質土器 火鉢か	脚部~ 底部	②(23.0)	①灰色(5Y4/1)	②灰色(5Y5/1)	0.5~3mmφの粗砂粒 多く混ざる	
12	A	第1遺構面SK5	埋土	軒丸瓦			黄灰色(2.5Y6/1)		0.5~1mmφの粗砂粒 少量混ざる	径(15.6cm) 珠文
13	A	第1遺構面SK5	埋土	丸瓦			灰色(N5)		0.5~1mmφの粗砂粒 少量混ざる	釘穴
14	A	第1遺構面SK5	埋土	不明			にぶい黄橙色(10YR6/3)		0.5~3mmφの粗砂粒 多く混ざる	瓦質焼成
15	A	第1遺構面SK5	埋土	土師器 サナ			にぶい褐色(7.5YR5/4)		0.5~2mmφの石英等 砂粒少量混ざる	径(9.0cm) 推定孔数7
16	A	第1遺構面SK5	埋土	土師器 サナ			にぶい黄橙色(10YR7/4)		0.5~2mmφの粗砂粒 少量混ざる	径(12.8cm) 推定孔数7
17	A	第2遺構面Pit35	埋土	土師器 竈形土器か	端部		①にぶい黄橙色(10YR7/3)	②黄褐色(10YR8/6)	0.5~2mmφの粗砂粒 少量混ざる	
18	A	第2遺構面SK4	埋土 第1層	土師器 竈形土器か	端部		①にぶい黄橙色(10YR7/3)	②黄褐色(10YR8/6)	0.5~2mmφの粗砂粒 少量混ざる	
19	A		第2層	土師器 竈形土器か	基底部 か	②(25.0)	①②浅黄色(2.5Y7/4)		0.5mmの砂粒 少量混ざる	
20	A		第2層	土師器 角状把手	体部		①②明黄褐色(10YR6/6)		0.5~2mmφの粗砂粒 少量混ざる	
21	A		第2層	須恵器	体部		①灰色(N5)	②青灰色(10BG6/1)	0.5mmの粗砂粒 少量混ざる	格子タタキ
22	A		第2層	韓式系土器 甕	頸部~ 体部		①灰黄褐色(10YR5/2)	②にぶい橙色(7.5YR5/4)	精緻	
23	B	第2遺構面Pit1	埋土	須恵器 甕	体部		①②灰色(N6)		0.5~1mmφの粗砂粒 少量混ざる	
24	B	第2遺構面Pit1	埋土	須恵器 甕	体部		①②灰色(N6)		0.5~1mmφの粗砂粒 少量混ざる	
26	C	攪乱坑	埋土	縄文土器 鉢か	体部		にぶい黄橙色(10YR6/4)		0.5~2mmφの粗砂粒 少量混ざる	磨消縄文

表6 出土遺物(石器)観察表

法量()は復元値

遺物 番号	調査区	出土遺構	層位	器種	法量(cm)	重量(g)	石質	備考
1	A	第1遺構面SD6	埋土	砥石	縦7.8 横8.0 最大厚2.2	175.4	砂岩	
2	C		第1層	石臼	径(30.0) 最大厚14.2	6,500	花崗岩	上臼

(3) B調査区

a. 基本層序(図21、写真36)

B調査区は身障者用便所新設地であり、小学校校舎の建設工事に伴う攪乱が大きいと予測された地点である。調査の結果、校舎基礎および既設の配管等により開発地の大部分が攪乱を受けていたが、南西部において部分的に埋蔵文化財が確認された。

調査区南西壁における基本層序は、

第1層…表土(層厚約50cm)

第2層…褐色(7.5YR4/6)砂質土※1~3cmφの小礫多く含む(層厚約10cm) ~ 第1遺構面の検出層

第3層…黄褐色(10YR5/6)砂礫※0.5~4cmφの小礫多量に含む(層厚約10cm) ~ 第2遺構面の検出層

第4層…にぶい黄褐色(10YR5/4)粗砂※砂粒0.5cmφと褐色(10YR4/4)細砂※0.5~5cmφの小礫多量に含むの互層(層厚30cm以上)

であり、A調査区と同じ基本層序となっている。遺構および遺物は、第2層上面(第1遺構面)と第3層上面(第2遺構面)で確認された。第4層上面では遺構は検出されなかった。

b. 遺構(図21、写真37)

第1遺構面

平面形態隅丸方形状の土壌1基を確認した。遺構の一部が調査区であったため全体の規模は不明であるが、検出部分での遺構最大幅は88cm、深さ6cmである。埋土内からは土師器の細片1点が出土している。

第2遺構面

ピット4基を検出した。この内1基(Pit1)では、底面に張り付いた状態で須恵器の大甕体部片が出土している。このピットは南西半部が調査対象地外であるため全体の形状は不明であるが、現状では平面形態楕円形、最大幅54cm、全長47cm以上、深さ17cmである。

c. 遺物(図22、写真38)

23・24は須恵器大甕体部片である。接合はしないが同一個体と見なしてよく、調整は23が外面平行タタキ後カキ目、内面に同心円当て具痕が明瞭に残る。24は外面平行タタキ、内面に内面に同心円当て具痕が明瞭に残る。甕腹部下の底部に近い体部片と考えられ、残存部位(23部分)での復元径は80~90cm内外が求められる大型品である。



写真 36 B調査区南西壁土層断面(北東から)



写真 37 B調査区第2遺構面遺構完掘状況(北から)

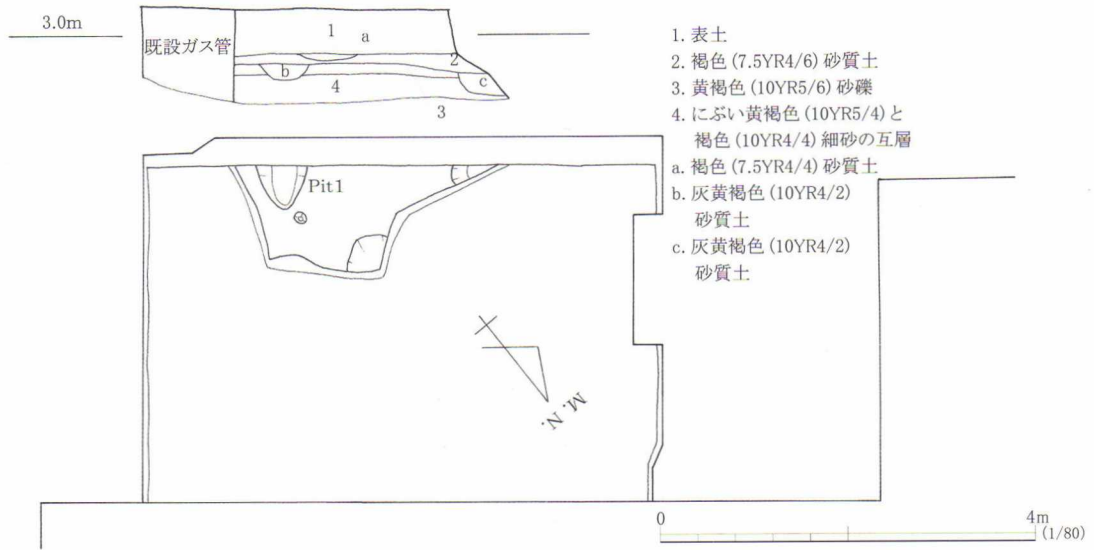


図 21 B調査区断面図・第2遺構面平面図

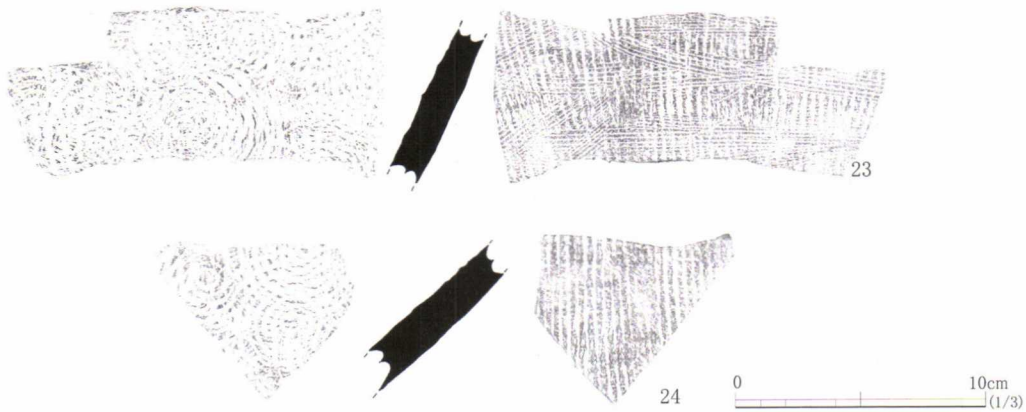


図 22 B調査区第2遺構面出土遺物実測図

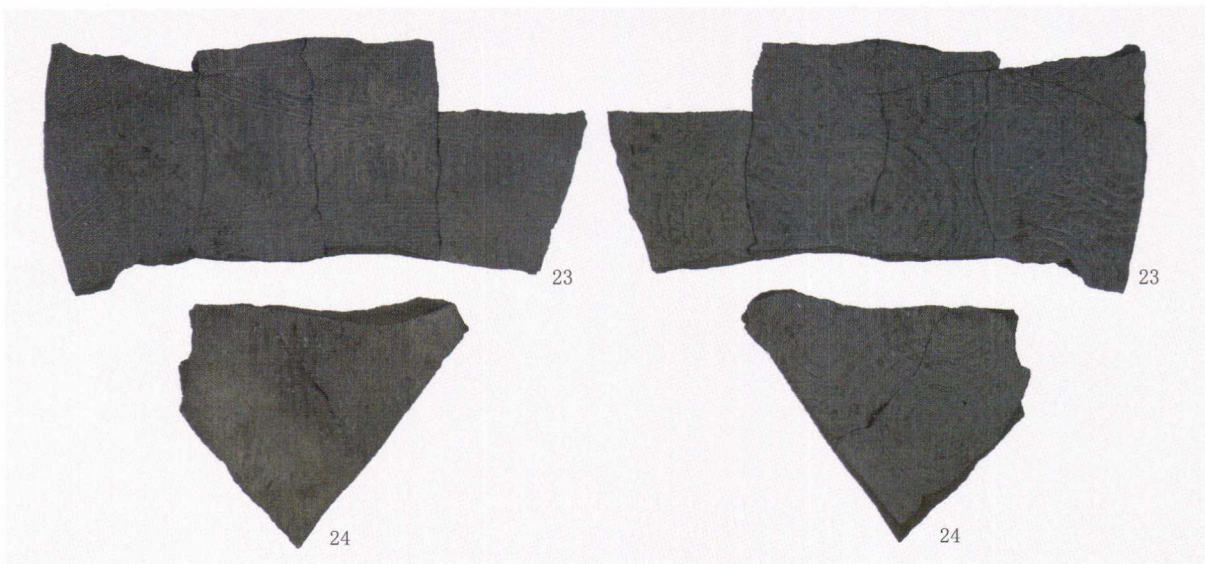


写真 38 B調査区出土遺物

(4)C調査区

a. 基本層序(写真41)

C調査区は小学校校舎玄関スロープ新設地であり、建設工事に伴う掘削深度が浅いために埋蔵文化財の保護上影響は少ないと予測された地点である。しかしながら、先行して実施したA・B調査区の調査結果から、小学校校舎北東部周辺では現地表面直下に遺構・遺物が埋存していることを確認した。したがって、教育学部附属光小・中学校および開発施工業者の協力の下、C調査区の立会調査も慎重に実施することとなった。

調査の結果、校舎建物回りを中心として調査区の大部分は基礎や既設の管路によって攪乱を受けていたが、調査区北部、校舎玄関前地点で遺構面が残存していることを確認した。遺構残存地点での基本層序は、

第1層…表土(層厚約20cm)

第2層…褐色(7.5YR4/6)砂質土※1~3cmφの小礫多く含む←遺構面の検出層

である。第2層は開発工事の掘削深度により上面を検出するに留まったが、遺構面の基盤となる層の土質は、A・B調査区の第2層(第1遺構面検出層)と同質のものである。

b. 遺構(写真40)

ピット13基を検出した。各遺構の規模および出土遺物は下表の通りである。

表7 C調査区遺構観察表

種類	遺構番号	平面形態	平面規模(cm)	深さ(cm)	出土遺物	時期	備考
ピット	Pit1	楕円形	16×22	5.8			
	Pit2	楕円形	19×25	5.5			
	Pit3	円形	径 14	5.7			
	Pit4	不明	(38)×不明	9.6			
	Pit5	楕円形か	(36)×不明	4.9			
	Pit6	楕円形	37×40	14.8	土師器		
	Pit7	楕円形か	31×不明	9.6			
	Pit8	楕円形	20×27	8.8			
	Pit9	隅丸方形	30×30	11.5			
	Pit10	楕円形か	41×不明	8.4			
	Pit11	楕円形か	36×不明	5.6	土師器		
	Pit12	楕円形	21×25	6.1			
	Pit13	楕円形	36×59	7.7			

c. 遺物(図25、写真39)

C調査区の遺構内からは土師器の細片が出土しているが、器種および時期の判別は不可能である。遺構面を覆う第1層からは、土師器細片、瓦片と共に石臼が出土している。

25は花崗岩製の石臼の上臼片である。風化が激しく表面の剥離が見られるが、主溝・副溝は残存しており、現状で主溝1条、副溝5条が確認できる。その配置から、主溝により8分割した区画内を副溝3条で充填する型式に復元できる。上臼の回転方向は左回り。また上下面に貫通する供給口と、側面には方形の挽き手孔が残存している。上臼復元径は約30cmである。

この他に、遺構面残存部南東側にある既設管路の埋め戻し土中から縄文土器片1点が出土している。

26は摩耗が激しいが磨消縄文土器の破片であり、現状で2条の沈線を有する個体である。鉢口縁部付近の破片と考えられる。岩田第I類bに該当するが、縄文時代後期前葉に属するものであろう。

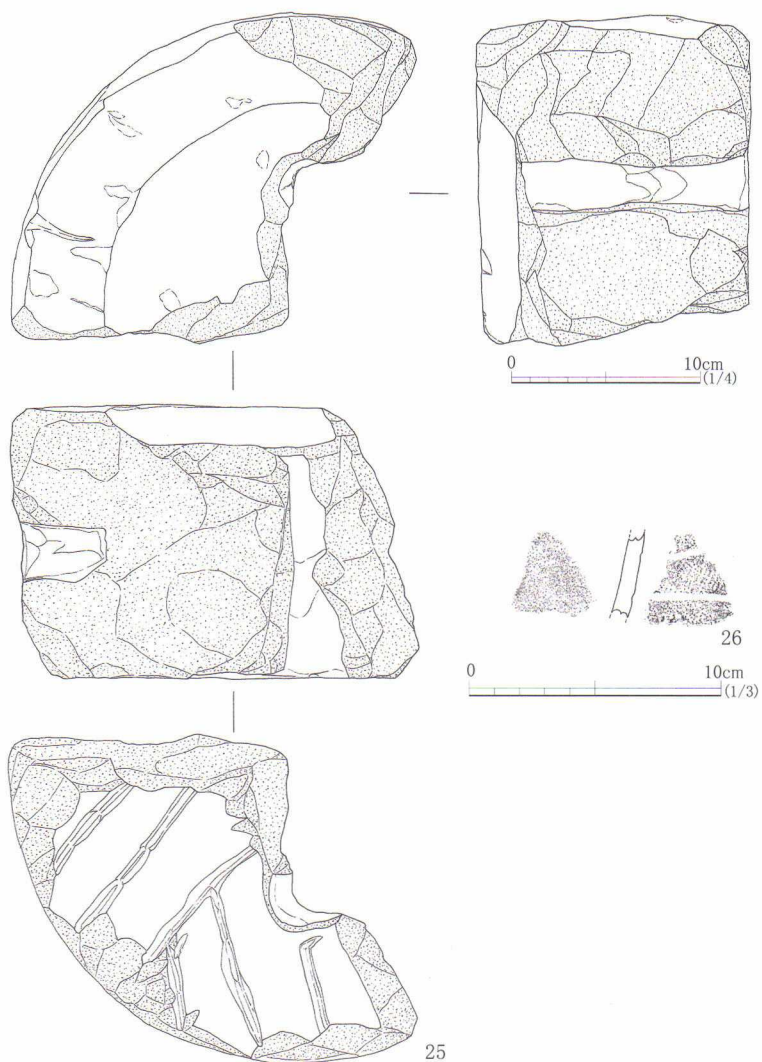


図 23 C調査区出土遺物実測図

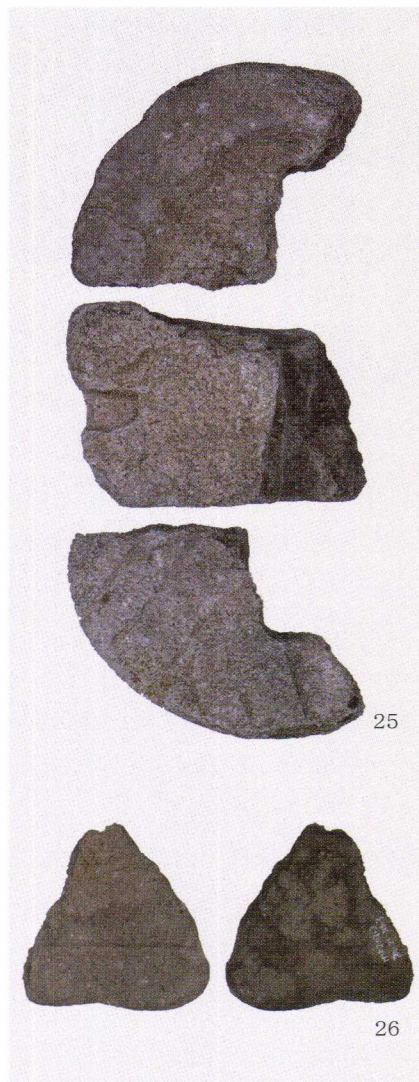


写真 39 C調査区出土遺物



写真 40 C調査区遺構完掘状況
(北西から)



写真 41 C調査区土層断面(南から)

(5)小結

今回の光構内の調査は、小学校校舎建物回りを対象地として実施された。調査の結果、A～C調査区で第2層上面を検出面とする第1遺構面、A・B調査区で第3層上面を検出面とする第2遺構面、A調査区で第4層上面を検出面とする第3遺構面が確認された。

この内第1遺構面は江戸時代後半を上限とする遺構群であるが、多くは現在の光小・中学校の前身施設に関連する施設の痕跡と考えられる。

第2遺構面は、遺構から出土した遺物では時期の特定には至らないが、資料館によって実施された過去の調査で確認されている古墳時代後期の遺構面と対応する可能性が極めて高い。この古墳時代後期の遺構面は、これまでに小学校運動場の南西側調査地点、中学校武道館調査地点で確認されており、いずれも丘陵部に近接する地点である。今回の調査ではA・B調査区で第2遺構面を検出しているが、A調査区の北東部では遺構面の基盤層である第2層が海岸部の浸食作用により消滅していることが確認されている。したがって、現状では小学校校舎付近が古墳時代後期の遺構面が埋存する北東限域である可能性を有している。

第3遺構面はA調査区でのみ確認されている。検出された遺構はピット群であり、現状では建物等の復元は困難である。また、遺構内からは土師器細片しか出土しておらず、時期を推定するには至っていない。少なくとも、古墳時代前期以降、古墳時代後半(第2遺構面)以前にこの地において人類の何らかの活動があったと記するに留めたい。

なお、第2・3遺構面で検出された遺構は、いずれも脆弱な基盤層を掘り込んで築かれたものであり、遺構上部に何らかの構造物が存在していたとしても長期間におよぶ使用は困難であったものと考えられる。過去の調査においても指摘されていることであるが、本地は農耕等の耕作には不向きな立地であり、集落が形成されていたとしても不安定な生産基盤・生業形態に支えられたものであったと推定される。また、過去の調査における丹塗り土器の出土や竈型土器の^{註6}顕著な存在は、そのような状況下での活発な祭祀行為を示唆するものではなかろうか。

以上が平成15年度に実施した調査成果の概略報告である。光構内(御手洗・月待山遺跡)の性格には未だ不明確な部分が多く、全貌の解明にはさらなる調査・研究が必要であろう。光構内における諸施設は老朽化が進んでおり、今後も設備の改修等に伴う掘削工事が計画される可能性が非常に高い。埋蔵文化財の保護に十分な注意が必要であることは言を俟たない。

[註]

- 1) 河村吉行(1992)「第3章 光構内教育学部附属光小学校運動場改修に伴う発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報X』, 山口
- 2) 福本幸夫(1966)「II 光市における先原始時代の遺跡」, 福本幸夫(編)『先原始時代の光市』, 光(山口)
- 3) 田畑直彦(2004)「第8章 平成7・10～14年度山口大学構内遺跡調査の概要」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XVI・XVII』, 山口
- 4) 豆谷和之・田崎美佐(1994)「第3章 光構内教育学部附属中学校武道館新営に伴う発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XII』, 山口
- 5) 潮見浩(1960)「山口県岩田遺跡出土縄文時代遺物の研究」, 広島大学文学部(編)『広島大学文学部紀要18』, 広島
- 6) 前掲註1
- 7) 前掲註3